（第３種郵便物認可）

読売俳壇

矢島　渚男　選

畠の草取るや根の土落としつつ　寒河江市　大谷　正行

【評】騒然とした世に、こんなに丁寧な仕事をしている人がいる…古風だが俳句の正道を行く人が居ることに励まされる思いがする。ありのままの自分を書き残すことの大切さ。

虫の音ではじまるけふの夕餉かな　日立市　菊池二三夫

【評】温暖化で今年の虫たちも大きな影響を受けている。こんな気候が続く中、現代人がようやく気付いてきた自然に包まれた暮らしの一景。

都会ではもう無理だろうか。

墓洗ふあなたの齢を越えました　相模原市　水野しづ子

【評】夫の墓を洗いながらの呟きであろう。上五で切れている。静かな句である。

いなびかり瞬きのなき埴輪の眼　川口市　渡辺しゅういち

争ふといふ老鶯のこゑ知らず　大月市　米山　明博

異国の丘に女子の墓ある遠き夏　鹿嶋市　津田　正義

塾の子も帰りは蟬を捕る目付き　吹田市　前田　尚夫

秋に入る港のような施設かな　名古屋市　鈴木　雅彦

立秋の空港ロビーにチンドン屋　枚方市　安達　京子

拾はれてもどる看板野分あと　甲府市　戸沢　茂紀

高野ムツオ　選

きたかさっさ秋田ババヘラアイスかな　横須賀市　大塚遊球子

【評】「きたかさっさ」は秋田音頭のお囃し。「ババヘラアイス」は街道沿いのアイスクリーム売り。年配女性がヘラで盛り付ける。一句のリズムが北国の活気を伝える。

八月のぴたりと閉づる自動ドア　調布市　浅野　文男

【評】自動扉が閉まっただけだが、「八月」が意味深長。季節が推移する時期との意味より戦争と犠牲者追悼の時期との意味が濃いからだ。

ゼリー食ぶ遠い記憶の星くずと　館林市　坂口　穣

【評】ゼリーの光に昔仰いだ星空を思い出している。そして、一匙ごとに、その星空を崩しながら食べている思いに浸っている。

水切りの石探しをり夏の果　高砂市　宮田　悦子

夏の雲盛んを秘めて動かざる　越谷市　小林ゆきお

盆舟を海に向けたる祈りの手　加須市　萩原　康吉

空高くつらなる能登の千枚田　対馬市　神宮　斉之

友の家空家となりぬ昼の虫　東京都　斎木百合子

空中に明滅したる糸蜻蛉　三原市　天崎　千寿

パズル解くとなりもパズル夜の秋　神戸市　吉野　勝子

正木ゆう子　選

賑やかなあの世へ返す魂送り　所沢市　岡部　泉

【評】あの世は遠く寂しく、この世だけが賑やかだった若い頃。しかし親しい人たちが次々に逝ってしまうと、あちらの方が賑やかな気がしてくる。自然な心境の変化である。

プールから上がる重さに狼狽ふる　横浜市　菅沼　葉二

【評】浮力のある水中から上がる時は、確かに体が重い。しかし狼狽える程だとしたら、よほど久しぶりだったのか。共感を呼ぶ実感の一句。

夏祭たこ焼き練習一つ貰う　松戸市　稲葉　豊美

【評】たこ焼きの試し焼き。素人なので、これでいいかと、皆で試食。地域のお祭にありそうな場面だが、句になることは珍しくて新鮮だ。

咲き始むちりりちりりと稲の花　横浜市　小林　敏和

時止まる如き真昼の暑さかな　町田市　枝沢　聖文

本名は子がつかぬこと知る墓参　柏　市　佐藤　敏文

向日葵をはぐれ鸚哥の食み零す　東京都　松永　京子

行く夏や黙禱は地を向く祈り　東松山市　坂東　輝一

酷暑なり一日のばしのあれやこれ　蓮田市　飛田多恵子

生身魂愚痴も不満も我慢せず　土浦市　今泉　準一

小澤　實　選

グエンさんも帰省シフトの組み直し　神戸市　山口　誠

【評】コンビニのアルバイトのシフトなのだろうか。外国人の帰省を描いているのが、まさに現代である。グエンさんはベトナム人では、と思わせる姓なのが絶妙なのだ。

荷風氏のこうもり傘をさす残暑　大津市　星野　暁

【評】文豪永井荷風は日和下駄に蝙蝠傘を持って、日々散歩していた。この厳しい残暑にもし生きていたら、日傘として使ったのでは。

ソーキそば作るも食ふも汗のシャツ　横浜市　武井　保一

【評】豚の骨付き肉が載った沖縄そばである。着替えても、すぐまた汗まみれになってしまうので、もはやあきらめて、着替えないのだ。

頭に巻き濡れタオルなり墓洗ふ　流山市　高橋　郁代

長崎忌平和の鐘の鳴りやむな　武蔵野市　田中福一郎

生姜擂る人差し指を押し立てて　小諸市　藤　雪陽

水澄みて父に手渡す柄杓かな　伊勢市　藤田ゆきまち

子どもらはおむすびもらった地蔵盆　千葉市　大和姫

笠にのぞく細き顎よ風の盆　川越市　益子さとし

ドン・ジョヴァンニの幕間に飲む新酒かな　市川市　小川　康夫

短歌あれこれ　永井祐（歌人）

蟬の評価

朝からずっとビルの中にいて、まだ帰るわけではないけれど、夕方頃に用事があって一階のロビーまで下りる。入口の自動ドアが開くと、屋外の蟬の声がよく聞こえてくる。鳴き方の種類はわからないが明らかに夏のおわりの感じの声だ。ビルの外に出ないまま、しばらくそこに立って蟬の声をきいた。夕方の陽光も入ってきていた。夏が極点を過ぎて死んでしまったことが伝わってきた。蟬はすごい音量だった。

「蟬は世の中で評価されすぎています」と以前一緒に働いていた同僚が言っていた。「いるだけで気持ち悪いのに、何でちょっといいものみたいに言われているのかわからない」。他の虫は嫌われて排除されているのになぜ蟬の評価は高いのか。そう言われると、蟬は特別扱いされている気もする。

鳴くだけの事ぁ鳴いたらちから
をぬいてあおむけに落ちてゆく
蟬ナイス　斉藤斎藤

題字デザイン・イラスト　福田美蘭